

金正浩と伊能忠敬

崔 碩義^一

金正浩（キム・ジョンホ、？～一八六四）と伊能忠敬（一七四五～一八一八）は、朝鮮と日本においてそれぞれ、これまでになかった精巧な地図を作った人物として記憶されている。しかし、ほぼ同時代を生きたこの二人がたどった人生を見ると、天と地のような差があったことに驚かざるを得ない。この際、両者を比較して、その原因の一端を探ってみようと思う。

まず、伊能忠敬についていえば、今の千葉県の商人出身で、後に数学、測量、西洋暦法などを学び、地球の大きさを測るために地図を作ろうと志した。幸い、江戸幕府に認められ、その手厚い支援のもとに蝦夷地の測量を成功させ、その後十七年という歳月を費やして、遂に、日本で最初の実測地図を作るという偉業を達成する（『大日本沿海輿地全図』）。もちろん、その業績は幕府と世間から高く評価された。伊能忠敬は一言でいって、刻苦精励の末、功成り名遂げた成功者の一人であつたといえるだろう。

一方、朝鮮の金正浩の場合は、残念ながらその経歴に不明なところが多い（両班の身分でなか

一チエ・ソギ 作家。在日朝鮮人運動史研究会会員。慶尚南道出身。最近の著書に『韓国歴史紀行』（影書房）などがある。

った)。彼は在来の朝鮮地図に満足せず、より正確で有用な地図を作することを自分の使命と考え、その後二十七年間、背囊一つで全国を駆けずり回ったといわれる。まず「青丘図（チョングド）」と「大東地誌（テドンチジ）」という人文地理書を作ったが、注目に値するのは、当時、実学者として著名であった友人の崔漢綺（チェ・ハンギ）がこの「青丘図」の内容を高く評価して、序文を寄せている点である。

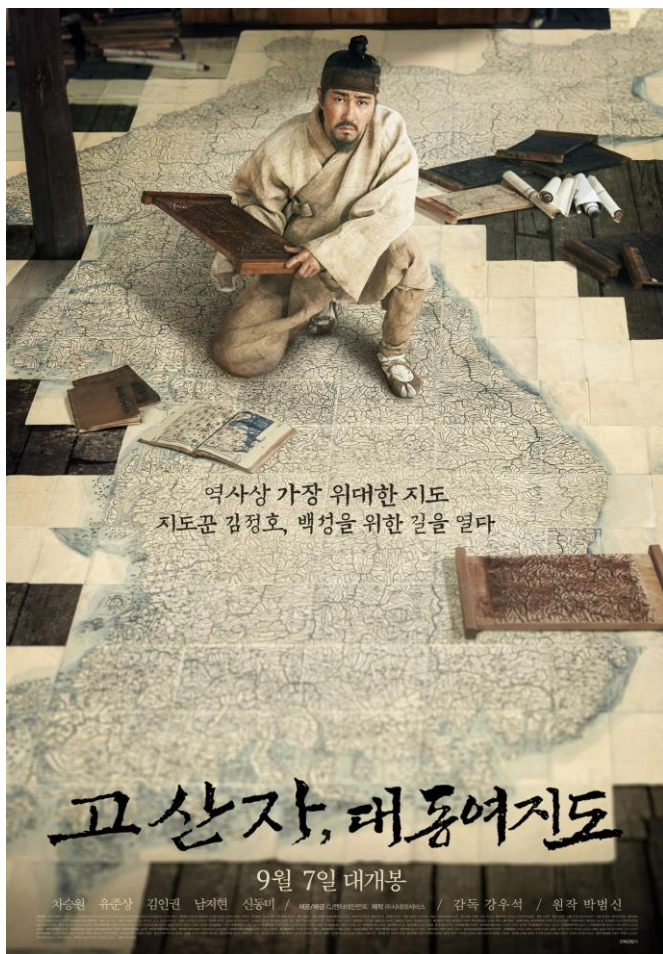
金正浩は更に、北は白頭山（ペクトウサン）から南は済州島（チェジュド）に到るまでを実地に踏査し、艱難辛苦の末、一八六一年、朝鮮地図の集大成ともいえるべき「大東輿地図（テドンヨチド）」を完成させたのである（全長6・6^{1/2}で、ソウル大学の奎章閣に所蔵）。彼には伝説が多く伝わっていて、北朝鮮の「朝鮮地図物語・金正浩の生涯」という映画でも、放浪詩人金サッカとの出会いを劇的に描いているが、これはもちろんフィクションである。

金正浩は早速、この「大東輿地図」を国に役立ててもらいたい一心で、ときの最高権力者である大院君（テウオングン）に献呈する。ところが地図を作った功績を評価するどころか、逆に「国の機密を外部に漏洩する危険な行爲をした」として逮捕し、しまいには獄死させてしまう¹。何と理不尽で痛ましいことであろうか。生まれた国が違っただけでこうも明暗が分かれるのかと思うと、私はやり切れない想いに襲われるのである。

「吉田光男氏によれば、「一八六四年に木版印刷で刊行した罪により作者（金正浩——引用者）は刑死した」（世界大百科事典「大東輿地図」の項）というが、金正浩の事績については不明な点も多く、近年、韓国ではこの「刑死説」に異論も出されている。

当時日本は、同じ鎖国をしても長崎の出島を通じて積極的に蘭学を取り入れ、「解体新書」一つ見ても分かるように開明的な機運が横溢していたのがとても羨ましい。これに反して李朝末期の朝鮮の為政者は、頑迷固陋な儒教一辺倒で世界の情勢にうとく、また、科学技術を軽視すること甚だしく、結果的に近代化に遅れをとり、やがて日本に国まで奪われてしまう。

（東洋経済日報二〇〇八年一月十八日）



韓国映画「古山子〜王に背いた男」

2016 年 9 月に公開された韓国映画。原題は「古山子 大東輿地図고산자 대동여지도」。監督カン・ウソク、主演チャ・スンウォン。映画では国立中央博物館に所蔵されている大東輿地図木版の原版が撮影され、使用された。